

《革命エデュケーション 特別編》

# メディアの向こうで歪む肉たち

「フランス・ベーコン展」によせて

# Francis Bacon

鵜川 こんにちは。今回は「革エデュ特別編」ですよ！ 記念すべき第一回は「フランス・ベーコン展」<sup>1</sup>を扱いたいと思います。ゴールデン・ウィークは終わってしまいましたが、ぜひ竹橋の「東京国立近代美術館」に足を運ばせたい、という目論見でもあります（笑）。

さて、フランス・ベーコンのことを知らない人も多いですが、歪められた肉体や顔の表現はあまりにも鮮烈なので、どこかで見て、脳の片隅に焼き付いている、なんていう人も少なくないんじゃないかな、と思います。僕のベーコン初体験は、大学の時かな。シュルレアリスム<sup>2</sup>にどハマりしている時期で、特に、

---

1 「東京国立近代美術館」で開催中。会期は2013年3月8日（金）から5月26日（日）まで。

公式サイトは <http://bacon.exhn.jp/>

2 芸術や文学における、20世紀初頭の重要な運動。

ルネ・マグリットやジョルジョ・デ・キリコ、サルバドール・ダリ、マックス・エルンスト<sup>3</sup>なんかに強く惹かれていた僕にとっては、あまりにも異質すぎて、好きとか嫌いよりも、ただひたすら「ギョッ」となったのを覚えています。

**細井** 実は僕も今回の回顧展まで、あまり彼の名前を意識することはありませんでした。確か回顧展はアジアでは没後初なんですよね。何かで作品は目にしていたと思うので、パンフを見て「ああ、この肉！」みたいな感じでしたけど（笑）。  
鵜川さんとは違って、僕の美術に関する

.....  
1924年にアンドレ・ブルトンが発表した「宣言」に始まる。夢や無意識が、現実と同じ強度を持つものであるとの考えに立ち、合理性を超えた実験的な表現が行われた。

3 いずれもシュルレアリスムの代表的な画家であるが、このうちジョルジョ・デ・キリコは他の画家に先行して活躍した画家で、多くのシュルレアリストに影響を与えた。

興味は、ある一時期までは印象派<sup>4</sup>とその周辺とか、ある種のモダン・アート<sup>5</sup>とか、けっこうコンサヴァティヴ<sup>6</sup>なものだったので、あまり接点がなかったのかもしれない。

鶴川　そういうことでは、ちょっと分類不能の感はありますね。シュルレアリスムとも言い切れず、モダン・アートでもなく、ベーコンが画業を始めた当時に主流<sup>7</sup>となっていた抽象表現主義<sup>7</sup>から

---

4 19世紀後半にフランスから世界へと広がった芸術運動。印象主義とも。それまでの写実主義から一変し、自然や光の柔らかな表現が特徴。ドガ、セザンヌ、モネ、ルノワールなど、日本でも人気の高い画家が多い。

5 20世紀前半に生まれた芸術上の新しい動向を総括的に言う語。

6 保守的。

7 抽象絵画を引き継いで、1940年代後半から50年代にかけてアメリカで注目された美術の動向。代表的な画家にジャクソン・ポロックやマーク・ロスコがいる。非具象的な表現がもてはやされた時代だが、1945年にデビューしたベーコンは具象にこだわり続けた。

は完全に距離を取っていたけれども、単なる具象でもない。あえて言えば、キュビズム<sup>8</sup>でホルスト・ヤンセン<sup>9</sup>をやった、みたいな印象を持っています。

でも、その割には——なんて言うと怒られそうですが——結構たくさんの方が来館してたんですよ。僕が行ったのは三月の中旬の平日だったんですが、もちろん並びこそしませんでした。こういうタイプの展示ではちょっと見ないくらいの方がいました。やっぱり、誰もがベーコンを無視できない、という（笑）。

「肉」の印象は、僕も強かったですね。

---

8 1908年頃から、パブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックを中心に展開された芸術運動。三次元的対象を複数の視点から観察し、それらの形態を一つの二次元平面に表現した。

9 1929年生まれのドイツの画家。官能的に歪められた肉体の表現が特徴的。ちなみに、キュビズムとは何の関係もない。

でも、今回の展覧会では、それ以前の作品も多く取り上げられていて、その変遷が面白い。

**細井** 僕が行ったときもそこそこ混んでましたね。実は上野の「エル・グレコ展」<sup>10</sup>とはしごをしたんですが、ぱっと見で気づいたのはその客層です。ベーコン展の方が年齢が若くて、なおかつアートに強い関心を持っていそうな層というか。

で、これだけ人が来たのは、宣伝の力と一言で言ってしまうことも出来るかもしれませんが、僕個人の考えをちょっと言わせてください。一時期からの音楽や美術、文学もそうかもしれませんが——  
いわゆる均整の取れた古典的、あるいは

**10** 上野の「東京都美術館」で2013年4月まで開催された。エル・グレコは16世紀末にスペインを中心に活躍した、マニエリスム後期の代表的画家。

モダニズム的な表現よりも、そこからちょっと逸脱した過剰さやアンバランスな要素が入っているそれの方が、人々を惹きつけるようになってきたんじゃないかと思うんですね。ベーコンのはある種異形というところまで行ってる感じですが、そういう時代状況みたいのものもあるのかな、とは個人的には思ったところではあります。

鵜川 なるほど。確かに、一昔前まで好まれていた美術って、印象派とかアール・ヌーヴォー<sup>11</sup>とか、それを「美しい」って言って安心なものばかりでしたよね。ベーコンは、どう転んでも「美しい」と

---

11 19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパを中心に展開した芸術運動。花や植物をモチーフにした有機的で自由な曲線の表現が特徴。ガラス工芸家のルネ・ラリックや画家のアルフォンス・ミュシャなどがおり、日本でも人気が高い。

は言い難い。むしろ、その前に立った時に、こちらの安心が強く侵されるような感覚に陥る作品だと言えます。

宣伝ということ言えば、今回のポスターは、ある意味ストレートにベーコンを表現したものだと感じました。そこには、恋人だったジョージ・ダイアを描いた三幅対<sup>12</sup>、《ジョージ・ダイアの三習作》<sup>13</sup>が用いられています。この絵では、男性とはっきり分かる顔が、左右と正面の三方向から描かれている。その顔には、パッと見、暴力的ともいえる改変が加えられているわけですが、よく見ると愛情のこもった手の平で撫でまわされたかのような様子にも見える。

---

12 三枚で一組となる絵の形式。トリプティック。

13 <http://bacon.exhn.jp/exhibition/index.html#01>

やはりベーコンといえ、この極端なまでに歪曲された肉感なわけですが、細井さんはこのポスターに用いられた作品、どう見ました？

**細井** そうですね、やっぱり「多義性」ですかね。尊大さ、空虚さ、真剣さとおかしみ……相反する要素が対象の、つまりここでは人物の部分部分から読み取れるものの、総体として一つの方角に行き着かないというか、複雑な感情みたいなものが後に残る。それこそ鶴川さんの話じゃないですが、「この人に対して愛憎半ばしていたのかな」みたいな感想も生まれるような、そういった面白さがあると思います。あとはその造形ですよ。ピカソは人間を様々な方角から見て、それを一つのフィギュール（形象）の中に封じ込めたわけですが、ベーコンの場合

は——この絵だと真ん中のがそうですが——意図的に顔面がねじ曲げられているような、そういう感じの書き方です。だから、例えばピカソの作品には、それほどの強い暴力性やグロテスクな醜悪さというのは一部の作品を除いては感じないんですけど、ベーコンの作品にはそういう感触を覚えたりします。

**鵜川** ピカソの表現はキュビズムと呼ばれていますね。三次元的な観察に基づいているという点で、ピカソの絵はとても理知的です。だからというか、僕個人はあまり好きではない。もちろん、心揺さぶられる作品もいくつかありますが、多くは絵の前に立った時に冷静になれてしまう。

ベーコンの描き方は、いくら対象を観察しても、決してそこにはたどり着かな

い。「顔」が描かれていることは分かっていても——最初に、細井さんが言っていたことですが——何より「肉」としての質感が優先されている。そのせいで、本来「顔」に存在するはずの表情やまなざしが失われている。「暴力性」ということで言えば、凶像を歪めていること以上に、そこにあったはずの人格が奪い去られていることに、より強い暴力性を感じます。(もちろん、相手の人格を奪うというのは、憎悪だけでなく、愛情によっても生まれる欲求です。相手が好きだからこそ、自分のことだけを見てほしかったりするように。)

**細井** さらに補足しておく、ベーコンが残している肖像画は三幅という形式で描かれているものがけっこうあるんですが、これは証明写真のフォーマットから

発想されたみたいですね。あれって囚人や犯罪者を連想する人も多いと思いますが、いわゆる撮影者の側が暴力的に自分の見方＝「まなざし」を押し付けるものですよ。そんなことも感じました。

**鶴川** で、そういう側面は、「肉」の質感が描かれるようになる 1960 年代以前にも見られます。今回の展覧会では、時代を追う形で展示が構成されていますが、その中で「第 1 章：移りゆく身体 1940s - 1950s」と題されている最初期の作品群がそうですね。

**細井** そこで、ベーコンが繰り返しモチーフにしているのが「叫び」なんですよ。そして一時期からそれが「教皇」というモチーフと繋がってくる。《叫ぶ教皇の頭部のための習作》<sup>14</sup> というそのまま

---

14 <http://bacon.exhn.jp/exhibition/index.html#01>

ズバリの作品があるんですが、これもかなりインパクトのある作品ですね。

「叫び」というのは有名なムンクの絵にもありますが、人々の内面にある不安とか抑圧された心理とかが爆発する瞬間<sup>15</sup>というのを描いているわけです。で、それを教皇という存在が発するのが面白い。日本だったら大僧正みたいな、徳の高いお坊さんの頂点に位置する人ですよ。特にヨーロッパはキリスト教社会だから、絶対的な権威を持っている。そういった、本来「叫び」とは無縁であるはずの存在が叫びを上げている。権威主義的なものへの挑発とも取れるし、一見心の平安を保っていきそうな人物の内面にある孤独や不安の描出とも取れる。いろいろ

15 ムンク自身の説明では、絵の人物は「自然を貫く果てしない叫び」に恐れおののいて耳を塞いでいるらしいが、ここでは細井の個人的な解釈を採用した。

ろ考えさせられますよね。

鵜川 加えて、ベーコンで興味深いのは、そういったモチーフの表現の仕方です。今、挙がった《叫ぶ教皇の頭部のための習作》は、ベラスケスの《インノケンティウス 10 世の肖像》に基づいていたり、旧ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインの《戦艦ポチョムキン》のワンシーン、オデッサの階段で叫ぶ乳母を参照していたり、と複数のメディアによって表現された人間の姿を重層させている。

さっき僕は、ピカソやキュビズムを理知的だと表現しました。そこに、モデルに対する客観的な観察が存在するからです。一方、このようにメディアを通じて捉えられた対象を下敷きにして描くベーコンの態度は、純然たる観察とは言い難

い。実際、彼が参考にした写真集や図録は、切り取られ貼り合わされ、物理的に歪められていた。これは、実物のモデルを相手にしては、決してできない行為です。だからこそ、「肖像」画でありながら、どこまでも対象から乖離した表現が可能になる。

そして、そこに描かれているのは、不思議なことに僕たち自身だという気がしてくる。もちろん、ベーコン自身の内面や時代的な不安が表現されていると考えるのが普通だとは思いますが、そこにメディアが介在してくるという事実が、僕たち自身をもその画面の中に閉じ込めてしまう。もし、ベーコンの時代に  
<sup>16</sup>  
Photoshop が存在していたら、彼はフ

16 アドビシステムズの画像編集ソフトウェア。主に写真編集（フォトレタッチ）に用いられる。ちなみに今回の表紙は、鶴川がPhotoshopで写真を加工して作成した。

オトレタッチをしただろうな、と何となく感じてしまいました。

**細井** 今、過去のメディアにおける表現を踏まえた作品、という話が出ましたが、いわゆる引用（サンプリング）ですよね。元の作品との差異や距離感によって、批評性がそこに生まれる。だから、ベーコンの作品はどこかポップアート<sup>17</sup>的な匂いがあるんですよね。グロテスクだけど、ただおどろおどろしいのではなく、対象とも自己とも距離を取ったような不思議なドライな感覚があります。

で、次に《スフィンクス》についてなんですが、今回の展覧会ではスフィンク

---

17 1950年代のイギリスで生まれ、60年代にはアメリカで全盛期を迎えた芸術運動。消費文化や大衆文化を題材に取り入れた。ロイ・リキテンスタインとアンディ・ウォーホルが代表的な作家。

スモチーフにした作品が4つ<sup>18</sup>展示されています（これは世界初だとか）。それぞれ特徴があるんですけど、僕は一見人物画のようにも見える作品が印象的でした。というのも、この作品はベーコンの個性がいい意味で普遍的な表現方法と融合していて、作品としての高い完成度を感じたからなんです。すごく身も蓋もない言い方をしてしまうと、他のベーコンの絵は家に飾れないけど、これならOKかな、みたいな（笑）。具体的に言うと、濃紺をベースにした色調とか、絵の中で描かれている人物が持っている孤独感みたいなものとかがそれに当たるんですけどね。もちろん、その中でスフィンクス

---

18 《スフィンクスの習作》1953年、《スフィンクス》1954年、《スフィンクス III》1954年、《スフィンクス—ミリュエル・ベルチャーの肖像》1979年の以上四点。ここで話題にしているのは、1954年の《スフィンクス》。

のフォルムだったりおぼろげにしか描かれない下半身だったり、ベーコン的な特徴はしっかりあるんですけど。

**鵜川** 僕も同じ《スフィンクス》に惹かれました。スフィンクスと二重写しになってる人物がネクタイ締めて背広着てる風なんですよ。色彩はめちゃめちゃ暗いのに、その取り合わせのポップさに驚きました。

サンプリングっていうのは、しっくりくる表現ですね。単なる引用とは違って、もともとの意味や意図が捨象されている。シュルレアリスムでは、意外な物同士の組み合わせによって固定観念を揺さぶるデペイズマン<sup>19</sup>という手法がありま

.....  
**19** 原義は「故郷から追放すること」。19世紀の詩人ロートレアモン伯爵の詩句「ミシンとコウモリ傘の手術台の上での偶然の出会いのように美しい。」(『マルドロールの歌』1869年)を原点にしていると言われる。

すが、それはあくまで、それぞれの物から意味を剥ぎ取ることが困難だということを前提にした手法です。でも、この《スフィンクス》の描かれ方は、そもそもスフィンクスとして見られることを期待していると思えない。背広の男性と出会う前に、意味が既に剥がれ落ちてしまっている。

同じ部屋に展示されている二点の《ファン・ゴッホの肖像のための習作》<sup>20</sup>にも似たものを感じました。そこで「ゴッホ」という名のもとに想定されているのは、色彩と形態だけなのかな、と。我々が知っている——その人生も含めて——ゴッホのイメージからすると、あまりにも明るくあっけらかんとしている。だから、それはサンプリングにすぎない。決して

---

20 <http://bacon.exhn.jp/exhibition/index.html#01>

オマージュだったりはないわけです。

そして展示は「第2章：捧げられた身体 1960s」に入っていくわけですね。ここに来て、いよいよベーコン全開、という感じを抱く人も多いと思います。

**細井** 「第2章」以降印象的なのは、やはり「肉」の感触ですね。先ほど話題にしたジョージ・ダイアは顔面をモチーフとした作品でしたが、この時期以降のベーコンの絵は——《横たわる人物像》が典型的だと思うんですが——裸体であるものがほとんどです。そしてそれらは、ギリシャ・ローマ時代の彫刻や絵画に登場するような均整の取れた肉体美ではなく、肥満していたり弛緩していたりするような裸です。今回は展示されていなかった他の「横たわる男」を見ると、もは

や人間とは呼べないのではないか、というようなフォルムだったりしますよね。言い方は悪いけど、「肉塊」という言葉が思い浮かぶような。皮膚という表皮の中に単に肉が収まっているだけというか、不定形な感じ。だらんと垂れ下がっていたり、さらにはその肉の持ち主も自身を支えることが出来ず蠢いている……そんな印象を持ちます。たとえば変かもしれませんが、江戸川乱歩の「芋虫」とか、『風の谷のナウシカ』の巨神兵とかを僕は連想しました（笑）。

鵜川 巨神兵かー。蠢いてる感はぴったりですね。

細井 ここから何を読み取るかというのも、読み解く人間の主観的な問題になってくるのかな、とは思いますが、さっきの鵜川さんの話じゃないですが、そこ

にやはり僕たちは自分の姿を見てしまう部分があるんじゃないかと思います。もちろん、外見的にはこんな姿はしていませんが、物質文明に汚染された人々の精神の醜悪さやグロテスクさを描いている、という評があったとして、多くの人が納得できる部分があるんじゃないかと思うんですね。それにしてもこの形象には圧倒されますね。横たわっている存在の、声にならない呻きとか苦痛みたいのも感じると同時に、それに対する突き放した視線も感じさせる画面構成には、戦慄すら覚えました。

**鶴川** この展覧会の面白さの一つが、ベーコンの主題の変化を、時代を追いながら見られるところですよ。ね。「第1章」で展示されていた五十年代までの作品は——重層するイメージという言い方をし

ましたが——まるでレントゲン写真や心  
霊写真のように、描く対象が別のイメー  
ジによって侵されていく描かれ方をして  
いました。ところが、この「第2章」以  
降では——細井さんの「肉塊」という表  
現のとおり——肉体や顔などをマッス<sup>21</sup>  
としてとらえている。僕はその時、手帳  
に「受肉」とメモしたんですが、写真を  
下敷きにした作品も、再びそこに肉体の  
持つ生々しさを再現しようとしているよ  
うに感じました。

で、もう一つ、これ以降のベーコンを  
考える上で外せないのが「三幅対」とい  
う形式ですよね。最初に話した《ジョー  
ジ・ダイアの三習作》は「第2章」に展

---

21 絵画・彫刻・建築作品において、一つのまとまりと  
して把握される部分を指す。原義は「塊」。

示されていますし、「第3章：物語らない身体 1970s - 1992」では、巨大な三幅対がいくつも並んでいる。展示の説明には、物語化を拒絶するための方法が、この「三幅対」だと書かれていました。僕はここに、重ねられたイメージからずらされたイメージへ、という方法的な転回を感じました。

**細井** 三幅対というと、最後の作品の<sup>22</sup>話は外せないですかね。ベーコン自身が一番右の一枚に描かれていて、左側は伝説的なF1ドライバー、アイルトン・セナだとされているそうです（この絵が描かれた3年後にセナもまた亡くなって<sup>23</sup>しまうのですが）。ベーコンとの個人的

22 <http://bacon.exhn.jp/exhibition/index.html#03>

23 この《三幅対》は1991年作。アイルトン・セナが事故死したのは1994年。ベーコンが亡くなったのは1992年である。

な親交とかはよく知らないのですが、ベーコンがアイディアの元にしていたスクラップ・ブックのことを思い出しました。鶴川さんがさっき「ベーコンが生きていたらレタッチをしたらどう」って言われてましたけど、まさにそういう感じの絵ですよ。肉のイメージも断片化・抽象化して、一種の記号みたいなものになっている。「第2章」の作品とかと比較すると、<sup>24</sup>ミニマルな感じの色彩とも相まって枯れた印象すら受けますよね。僕はこの作品も特に印象に残ったものの一つです。

鶴川 確かに、この作品はベーコン的方

---

24 「ミニマル」そのものは「最小限の」を意味する言葉だが、ここでは「ミニマル・アート」を意図している。「ミニマル・アート」は、工業製品や近代建築の影響を受けて、装飾的な部分を排除し、単純化された形態や色彩での表現を行った美術運動。1960年代のアメリカで広まり、抽象表現主義を批判的に継承した。

法の極限という印象すら受ける作品ですね。展覧会の公式HPでは「(背景の)黒の矩形は、80歳を超えていたベーコンが死期を感じていたことを思わせませ<sup>25</sup>ず」と書かれていますが、全体に静謐さを感じさせる作品です。僕はここに、肉体の限界との和解を感じました。諦めでも憤りでもない、人間が離れることのできない物質性ゆえの脆さを、ただあるがままに描き出す。そんな真摯さが感じられました。

そして、三幅対という形式の可能性も興味深かったです。対象やモチーフ、色彩や空間によって結びつけられた三つの画面は、響き合い、裏切り合い、単一の対象に収束することがないために、鑑賞する我々はその大きな三枚の前で行きつ

戻りつ、ふらふらとたゆたうことになる。

ベーコンの絵は、僕達の解釈の欲望を煽りたてます。でも、それ以上に、絵を見た我々自身が、自分の身体を意識せずにはいられなくなる。自分の背後に写る他者を、自分の内から湧き出す肉を。とりわけ、ポータブルなデバイスの発達によって、自己像の多様化と、身体感覚の極小化が進み続ける現代<sup>26</sup>において、ベーコンを鑑賞することの意味は、これまでになく高まっているという気がしました。

**細井** そうですね。自分（および他人）の身体を意識せずにはいられなくなる、というのは本当にそうだと思います。それ

---

26 テクノロジーの進歩と我々の自己像の関係については、「革命エデュケーション 第一部『iPhoneの先にある未来』」でも取り上げた内容である。ぜひ参照されたい。

も、さっき言ったように古典的な彫刻／  
絵画に表象されているそれやアスリート  
的なそれではなく、もっと不定形で不可  
解で生温かいものです。自分の身体の中  
に詰まっている「肉」と、それを支える  
身体の脆さについて思わずにはいられな  
いですね。その意味で、身体＝自己につ  
いての捉え返しを迫られますし、その行  
為自体が他者性に対する一つの入り口だ  
ったりしている。

それは、最初に話したことに戻るん  
ですが、僕たちの芸術というものに対する  
感覚が、「均衡の取れた美」から逸脱し  
たものへと向かいつつある、というところ  
と繋がっているんじゃないかと思うん  
ですね。やっぱり実際に美術館に足を運  
んで、「ベーコン的体験」とでも言うべ  
き感覚を味わってほしいなと思います

ね。ウェブの画像とかで見るとよりも、もっと直接的に感じるものがあるはずですから。

**鵜川** そうですね。ウェブはもちろん手軽に作品の姿を伝えてくれますし、画集も多く情報を与えてくれるわけですが、それでも実物を美術館で鑑賞するという意味は全く別物です。特に今回テーマにしたベーコンは、僕たちの全身に語りかけてくるような作品です。だからこそ、多くの人に美術館を訪れてほしいと思います。

さて、世田谷学園では中学一年でギャラリートークを実施していますが、芸術作品との出会いはタイミングが重要です。もしかしたら、ギャラリートークでは響いてこなかったものが、別の機会に、大きくなった体と心に響いてくるかもし

れない。そして、何より美術作品との対話というものが自由だということを忘れないでほしいです。今回、僕たちが行った対談は、あくまでも僕たち自身の感想に基づいたものです。そこでは、正解も間違いもない。もし間違いがあるんだとすれば、それは誰かの出した正解を鵜呑みにして繰り返すことです。自分の体を通った言葉、それを意識するには、今回の「フランス・ベーコン展」は最適な場だと思います。

ということで、読者のみなさん、「革命エデュケーション 特別編 第一回」はいかがだったでしょうか。今後も、様々な機会をつかまえて「特別編」を展開していきたいと思います。もし、取り上げてほしい作品や展覧会があれば、お気軽にご意見をお寄せ下さい。

それでは、またお会いしましょう。

(特別編 第一回 完)

---

《革命エデュケーション 特別編》

【第一回】

メディアの向こうで歪む肉たち

「フランス・ベーコン展」によせて

平成25年5月9日 発行

著 者 細井正之・鶴川龍史

編集者 鶴川龍史・細井正之

発行所 世田谷学園 国語科